

風の末裔シリーズ・3rd シーズンの4

～ 君影 ～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

紫紺の空を二つに割って、翡翠色の光が降りて来た。地上で目印のカンテラを掲げていた少年が駆け寄る。

「御足労、痛み入ります、蒼の長様」

「出迎えに苦勞様です。皆、健勝ですか？」

「…先ずは、西風の里の中へ。僕の影から踏み外れず着いて来て下さい。今、結界を三重にしているのです」

カンテラの少年は馬に跨がり、先に立って歩き始めた。砂と岩の荒地の同じ所を何回か回り、最後に小さな崖を跳び降りると、いきなりまったく別の景色が現れた。

今まで見えなかった大きな池と、その手前に、荒地にポツポツと住居が点在するだけのひなびた部落。どの家も、古い石の壁が剥げ落ちて質素だ。入り口の広場が大きな馬繋ぎ場になっているのだけは、蒼の里と一緒だ。

夜だというのに、多くの住民が戸外に出て来ていた。遠来の待ち人を止めた里人は、手を組んで一礼する。蒼の一族とは少し違う…、群青色の髪は同じだが、肌の色は餡色で、瞳も茶色か灰色だ。そして皆一様に疲れた感じでやつれている。

「蒼の長殿、よう、お越し下さいました」

数人のクシャクシャの老人が里人の中から進み出た。

「夜の砂漠は凍えられましたでしょう。手足の湯の用意がございます」

「お気遣い感謝します。大丈夫です。先ずは浅葱(あさぎ)の君殿に」

長は口早に言って、曳いていた鬪牙の馬を、受け取りに来た子供に預けた。よく見ると、この集落は丸まった老人と子供ばかりだ。背の高い長はやけに浮いて見えた。

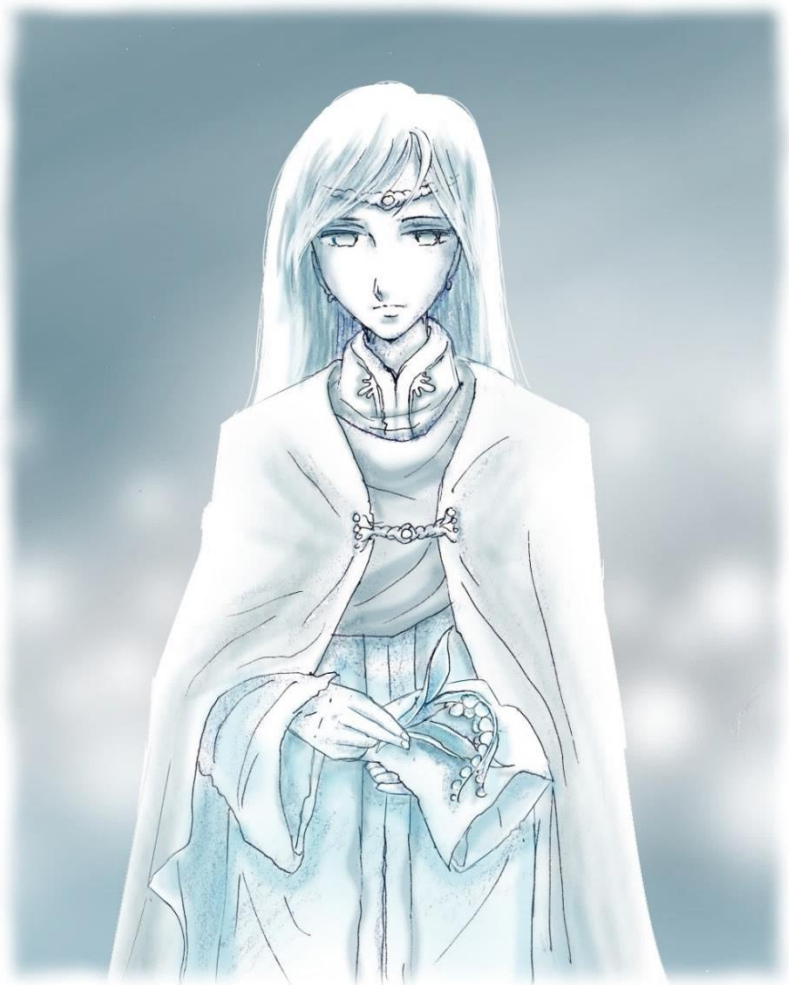
池の畔に少し大きな白い建物があり、周りに無数の燭台が立てられていた。集落全体が真っ暗だと思ったが、里中の燭台がここに集められていたのか。何百の蠟燭に照らされて、其処だけぼうっと別世界のようだ。

入り口の御簾を上げて中に入ると、ここも両脇に蠟燭の列が設えられていた。奥に銀の猫足の寝台があり、その上に白い棺が乗せられていた。棺には浅葱色の内掛けが掛けられている。

長は静かに棺に近寄った。浅葱色の着物の縁にそっと手を掛ける。

繻子(じゆす)の寝具に碧緑の髪が波打ち、古い遺跡に沈殿した琥珀のように一人の女性が横たわる。閉じられた唇も睫毛も昔のままで、今にも、あの明るい茶色の瞳を開きそうだ。

長は黙ってそのヒトを見つめ、懐から布包みを取り出した。



蒼の里の、自宅の前に咲かせている、鈴蘭の花。白い小さな花をそのヒトの胸に抱かせて、再び浅葱の着物を掛ける。

それから、後ろに控える老人達に向き直って、囁くように口を開いた。

「葬儀は？」

「明朝…。貴方様にお逢いしたかろうと、延ばしておりました。これで、浅葱様も心残り無き物と…」

「心残りっ?! 大有りだ!!」

御簾が乱暴にめくり上げられて、一人の娘がどかどかと踏み込んできた。

上気した鮎色の頬の上に真っ白な白眼、その中の瞳は茶色というより燃える焔のオレンジだ。棺の女性と同じ碧緑の前髪は、頭の上で櫛で留められ、後ろ髪は襟足でキッチリ切り揃えられている。まるでつい最近切り落としたような切りの口だ。

「憤みなされ、蒼の長殿の御前ですぞ!!」

老人の一人が何とか口を開けたが、そんなの聞いていないように、娘は続けた。

「里の行く末も定まらぬまま、不義な連中の刃に掛かった。安らかになど眠れるものか。きっちり仇首を取るまでは」

仏の前で物騒を口走る娘を老人達はおろおろと持て余したが、

蒼の長は張り付いたように娘を見つめ、やがて目を見開いた。

「……モエギ…? モエギなのですか? 貴方が、あの時の?

何とまあ!」

娘は一瞬止まったが、すぐまた長と老人達を睨み付けた。

「あんた達が軟弱で腰抜けで、自分達の長の仇も討てずに臆抜けているならそれでいい! 私は独りでやってやるから!」

そう言つと、浅葱色の打ち掛けの上にぼんと何か投げて、誰に何を言つ問も与えず、疾風のように出て行った。

「も、申し訳ありません…、失礼を…」

老人のしどろもどろな言い訳より、長は浅葱の布の上の一房の鈴蘭に心奪われていた。

里の長の自宅の庭でさえ、終わりがけの一輪だったのだ。更に南のこの地では、探し出すのに苦労しよう。

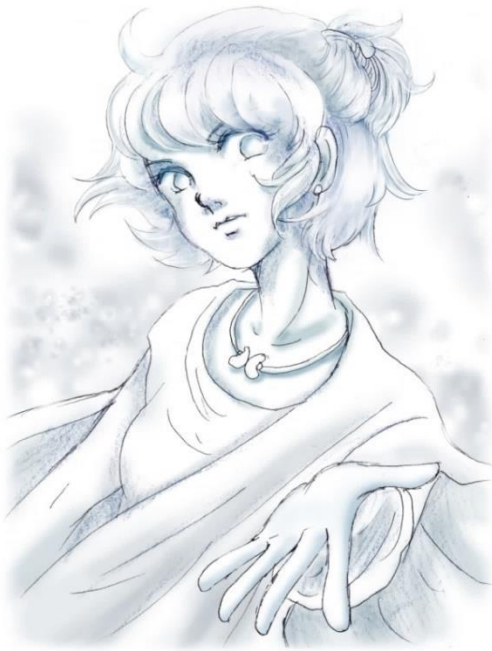
西風の里の長、浅葱の君の、こよなく愛おしんだ花。

……君影草(きみかげそう)……。

緋色のマントをなびかせて、鮎色の肌の娘は馬を駆って、砂漠の中を行ったり来たりしていた。

「ちくしょう!」

西風の妖精の乗る馬は、人間の乗る馬に近く、見目はほとん



ど変わらない。風で包んで人間から見えなくなったり、疲れを貯めずに走り続けたり、丘一つ越えるジャンプをしたり…、その位は出来るが、蒼の妖精の草の馬のように『飛行』は出来ない。『風の末裔』を操るのはあくまで蒼の一族だけなのだ。

その蒼の一族の大きな草の馬が、娘の騎馬の前にふわりと降り立った。

「砂の民の部落も結界を二重三重に張っているらしいですよ。そう簡単には入り込めないでしょう」

「……………」

娘はムツリして何も答えず、馬を返して去ろうとした。

「浅葱殿は、病死だと聞いて来ました」

去ろうとする正面にいつの間、蒼の長の騎馬が立っていた。

「違う!! 砂の民の卑劣な嘘に騙されたんだ! 同盟を結びっ

て言っ、奴等、剣に毒を塗って交渉の席に来たんだ!!」

「……………」

「里の者は皆、腑抜けた! こんな事をされて黙って凌(しの)げって言うんだ! 私は違う! 誇り高く仇を討つ!」

「……………」

蒼の長が何とも判断付かない表情で、馬の前に立ち塞がって動かないので、娘は焦れた。

「其処をどけー！」

「ああ、はあ…」

長はあっさり横に退いた。

娘はどかどかと前進したが、引き止めも宥なだめもしようとしない長の方を、見ないで言った。

「何しに来たんだ?！」

「はあ、貴方の様子を見て…」

「違っ!!」

娘は目を血走らせて振り向いた。

「何しに西風の里へ来た?! と聞いている!! ……今更!!」

「……………」

「何故母者が存命の内に来なかった?! 一度も!!」

長は黙って瞬きもせず、娘の燃えるような瞳を見つめていた。いつまで経ってもこのヒトが喋らないので、娘は顔を反らして馬を進めた。

去りかける娘に、長はやっと小さく口を開いた。

「あの方と…私は…、縁が薄かったのです…」

娘は激しい眼をして振り向いた。歯をギリギリ言わせて、投げつける言葉すら見付からない! そんな顔を背けて、今度は二度と振り向かずに馬の腹を蹴って、砂の原に消えた。

蒼の長は茫然と立ち尽くしていた。

上空の風が澱んでいる。この地方の空を渡る風は西風の一族の長が操るのだが、長の能力の最期の継承者、浅葱の君が急に隠れてしまった。折しも東方よりの人間の侵入者が戦乱を持ち込む。

風が止まった上に、悪い気が溢れ、流れない。水は濁り、病が流行り、争いが起こる。悪い気は全てを、陰々うつつとと澱みに導き、人間も人外も、苛立ち荒んでいた。

西風の老人達は、眷族である東の国の蒼の一族に、援助を要請して来たのだ。

「風を流すだけなら簡単です。しかし澱んで染み付いてしまったこの濁りを洗い流すのは…、ただ風の術だけじゃ無理かもしれませんね…」

長は溜め息を吐いて、西風の里へ馬を向けた。

本当に…もっと早くに助けを求めてくれれば…。いや、あのヒトは我が身が危ついと判っていても、自分には寄り掛かってくれなかったんだろう。そんなヒトだ。昔っから……………。

「……………!!」

ただならぬ気配を感じた。モエギが駆け去った方角だ。

「頼みます!!」

手綱鞭一閃、鬪牙の馬は一瞬でその場から消えた。

灰色の砂塵が舞う。

砂嵐の中に取り残されたように、緋色のマントの騎馬が立ち
尽くし、周囲に数体の騎馬が囲んでいる。

灰色のマントの騎馬達は、やはり人間の馬に近いが、乗って
いるのは人間ではない。ここいらの砂漠の砂と大地を仕切る、
砂の民の男達だ。

「西風の娘だ」

「ひっ捕まえる！」

「気を付けろ、結構な跳ねっ返りだぞ」

娘は剣を抜いて、迷わず刃の側を男達に向けた。

男達は素早く散った。

「馬を狙え!!」

砂塵の中から、石を両端に結んだ紐が飛んで来た。馬は脚に
紐を絡ませて、悲鳴を上げて止まってしまった。

娘は馬から飛び降りて、剣を構えて呪文を唱える。カマイタ
チの風が空を切り裂く。

「お前等、退け!!」

後方の小高い丘で声が響いた。灰色の騎馬達は素早く左右に



散った。

一頭の真っ黒い騎馬が、丘を飛び越え躍り出た。漆黒の馬に黒マント黒覆面の男は剣を抜いて、飛び来る風の刃を叩き落とし、あっと言う間に風使いの娘に迫り、その手の剣を跳ね上げた。細身の剣は大きく飛んで、離れた砂地に刺さった。

「阿呆ウ!! 簡単に剣の刃の方を向けるんじゃない!!」

「うるさい!! 裏切り者!! 裏切り者!!」

漆黒の男は覆面を引き下げた。意外と年若い、砂の民の青年。地の底に吸い込まれるような真っ黒な瞳を大きく見開いて、娘を睨み付ける。

「どっちが裏切りモンだ?! 先に非道をやらかしたのはそっ

ちだろ!!」

「何を…!!」

砂を蹴って二頭の小さな騎馬が二人の間に割って入った。西風の里の子供? 一人は蒼の長をカントラで出向かえた少年だ。「モエギ様、助太刀に来ました!!」
「アサギ様はお優しくかった。大好きなヒトの仇を討てるのなら、ボク達だって戦います!!」

地上の娘と馬上の青年は、一瞬躊躇した。

その時、突風が吹いた。先程のカマイタチとは段違いの、鋭

い風の塊が、うなりをあげて飛んで来て、黒の青年の剣と小さな二人の剣を跳ね上げた。

四人が振り向いた方向に、背の高い騎馬が、群青色の長い髪をなびかせて険しい顔で立っていた。

突然現れた見知らぬ妖精に、灰色の砂の民達は緊張して剣に手を掛けた。そのヒトは周囲のその様子に一瞥もくれず、静かに馬を進めて四人の前に立った。

砂の民の男達は何故か一步も動けなかった。そのヒトが一見無防備なようで、一部の隙も感じさせなかったからだ。

蒼の長は静かに下馬し、まずはフイと横に歩き、足に紐を絡ませて不安そうに棒立ちしているモエギの馬の鼻面を撫でて、紐を切ってやった。

それから啞然としている四人の内の、小さな二人に微笑みかけた。

「勇気があるのは結構。大事なモノを護りたい気持ちも大切です。しかし、自らも大切にしなければなりません。貴方がたを大切に育んでくれたヒトの為に」

二人の少年は唇をキュッと結んで長を見つめた。

「里へ戻りなさい。貴方達の姫は大丈夫ですよ」

少年達は頷(うなず)いて、素直に馬を返した。

灰色の騎馬達が二人に手出ししないのを見届けてから、長は今度は娘に向いた。

「…貴方の憎しみが小さい者にも広がる。良い事だと思えますか？」

「…!!」

モエギが口応えする前に、黒の青年が反応した。

「そいつを信用すんな！ 早くにこの丘の向こうにいたのに、手助けしないで眺めていたんだ！」

娘の瞳にまた激しい焰が燃え上がった。

「やっぱりあんたはウワケだけだ！ 母者すら謀って！ 許さない！ 許さない!!」

素早く剣を捨て馬に飛び乗り、緋色のマントを翻して里と反対方向へ駆け去ってしまった。

灰色の騎馬達が追う素振りを見せたが、青年が目配せでとめた。

「やれやれ…、貴方のお陰で決定的に嫌われてしまいました」
長い髪を掻き上げて青年に向き直る妖精を、灰色の騎馬が取

り囲む。

しかしそのヒトはお構いなしに青年だけに話し掛け続けた。

「手出ししなかったのは、あの娘が大丈夫だったからです。貴方が来ましたからね」

長い髪の妖精は黒の青年を見た。その目は鋭く青年の瞳の奥を見据えていた。

「…?!」

青年は本能で危機を感じて、掌で目を覆ったが、長は穏やかに続けた。

「……砂の民の…総領息子の…ハトゥン？ 良い名前ですね。

…父君はご健勝ですか？」

モエギは砂の原の中をトボトボと宛もなく歩き続けた。止まると泣いてしまいそうだったからだ。

剣を弾かれ万事休すの所にあのヒトが来た時、嬉しかった自分がいた。母と自分を大切に思ってくれていたと…、心の奥でそうあって欲しいと願っていたからだ。情けない…。

「あのヒトは、子供達に対する義務を果たしに来ただけだ」

遠く東の豊かな草原に、緑の馬で風に乗る空を駆ける眷族がいると聞いた時、幼い胸が踊った。

「いつか、逢えるの?」

「そうね、いつかね…」

微笑む母がふと遠い目をしたが、小さなモエギには分からなかった。ただ、憧れの気持ちだけが大きく胸に広がった。

少し大きくなって、古い老人や口さがない大人達に、自分が生まれる前は、結構蒼の里と交流があった事を聞いた。それどころか…、西風の長の血を引く母と、東の草原の蒼の長の縁談が、何度も持ち上がった事も知った。

一度目はまだ母の父が西風の長として健在だった時代だ。

蒼の長の三人の弟子達が育ち、蒼の里の運営も安定して来た頃。

一人娘の浅葱あさぎ(あさぎ)が嫁ぎ、第二子あたりをこちらの世継ぎに寄越す…、という図式が出来上がって事が進もうとした時点で、西風の長が急逝した。急遽、浅葱が長を継ぐ事となり、興入れの話は立ち消えた。

二度目は、蒼の里で三人の弟子が長を襲名した頃だ。

里は弟子達に任せて、蒼の長殿が婿入りな形で西風の長を兼任する…、そんな話でもたげたが、浅葱の君が口を差し挟んだ。

「弟子の一人は眠ったままだし、世話を焼いている人間の娘を置いて、来て頂く訳には行かないでしょう」

浅葱は老人達も知らない蒼の里の事情に、妙に詳しかった。

三度目の正直…。

眠り続けていた弟子の一人が目覚め、長殿の心配事もなくなった。今度こそ身軽に西風の里へ来て貰える物だと、老人達は浮かれた。

しかし…浅葱の君が突然身籠った。父親は誰か？ 浅葱は

頑なに語らない。

老人達は髪の毛の先程期待したが、生まれた子供は蒼の妖精が父では有り得ない、平凡な娘だった。

いくら何でもこれは蒼の長に非礼過ぎる…。

以来、西風の一族と蒼の里は疎遠になった。

今回、他部族との争い続きで若者が絶滅し、浅葱の君まで亡くなって、やっと蒼の里に助けを求めたのだ。

過去の事を水に流して来てくれたヒトに、エラい言い方をしましたモノだが、モエギには腕に落ちない事が多くあった。そんなに愛し合っていたのなら、一族も長の立場も後回しに、結ばれてしまえばよかったのに!!。

不意に馬が立ち止まった。

「??？」

立ち止まった拍子に、髪に差していた櫛が落ちた。緑の玉の付いた櫛は膝で跳ねて、娘の手をすり抜けて地面に落ちてしまった。

「ん…もう…！」

母の仇討ちを誓った時、勢いで、長かった髪をバサリと切り落としてしまった。しかし母の形見のこの櫛だけは身に付けていたかったのだ。

「やっぱり無理があるのかな?」

モエギはうなじの髪を指ですいてみながら、馬を降りた。

岩と岩の間の砂地に落ちた櫛に手を伸ばす。

「…?!…」

今、櫛が動いた気がした?

馬がスヒン!と鳴いて、いきなり後退りした。危険?!と、

感じなければいけないのだが、娘は櫛に気が行って、一瞬の判断が遅れた。地面全体がぐにやりと揺れて、手を伸ばした身体がバランスを崩した。

「流砂!!」

慌てて掴まるものを探すが、周囲の岩も浮き石で共に流れてくる。

「……!!」

遙か後方に逃れた馬は無事だった。

「誰か、呼んで来て!」

馬は地平に消えたが、間に合っただろうか?

「何て間抜けなの!」

砂漠の民の名が泣く。馬が教えてくれたのに!

目に見える周囲の砂はゆっくり動き、しゃがみ込んだ膝まで埋もれている。下手に動くと埋まる速度が早くなるだけだ。辛うじて岩に掴まり身体を保つが、その岩もゆっくり沈んで行く。

こんな所で埋もれて終わるっていうのか?

「まだ、何にも、していないのに!」

砂を噛んだその時、目の前に結んだ革紐が飛んで来た。

助かった?! 紐の差し出し先を見ると……

「あんた……」

蒼の長が四つ這いで大岩の端から身体を伸ばして、馬から解いた手綱を投げてよこしているのだ。

「……………」

モエギは掴みかけた両手を離れた。長の目が戸惑う。娘はもう半分砂に埋もれていた。

「……掴んで下さい……」

「嫌だ!! 本当は助けたくない癖に。さっきの子供達の手前、仕方なく助けるんだろ!」

「何でまた、そんな風に思っちゃうんです?」

更に砂が流れて、娘は遠ざかる。

「……………」

長は大岩から降りて、紐を伝って四つ這いで娘に近づいて来た。手も膝も砂に埋もれる。

「何やってる?! 来るな! 流砂を知らないのか?! 沈むぞ!」
「だって貴方が来てくれないなら……こちらから、行くしか、」

ないじゃないですか」

長は埋まりながらモエギに辿り着いた。

「あんた、私を嫌いなんだろ?! 恨みに思ってたんだろ!」

モエギは長の手を振り払った。

「だから、何だって、そう思うんです?」

「私が生まれなければ、想い人と一緒になれたんだろ?! 私の

せいで愛する人と離れなければならなかったんだ!」

砂の中で長は目を真ん丸にした。

「…誰…と…?」

「だから、母者と! 浅葱の君と!」

「…?!」

長は一瞬固まって、その後、大真面目に叫んだ。

「冗談じゃありません! 何処からそんな話が湧くんんです?!」

「えっ?」

今度はモエギが固まる。

「誰が誰と一緒にいたかだったですって?」 「ごめん被(こ)うむ

ります! あんな怖いヒト!」

「え? え、え…?」

「いつもいつもヒトの事、臆抜けだの、軟弱だの。やっとその口が黙ったと思ったら、おんなじ顔の貴方が現れて、同じ事を

言うんですもの、目眩がしましたよ! うわっぶ!!」

呑気に喋っている間に、いい加減砂に埋もれて、口の中に砂が入って来た。

「馬鹿行って…ケホケホ、ないで…ケホホ、とっとと掴まって下さい!」

モエギは茫然と、言われるまま長の両肩に掴まった。

二人が砂に呑まれる直前に、砂の海スレスレに鬪牙の馬が飛んで来た。砂の上に僅かに出た長の手が、その前肢の毛爪を掴む。馬はそのままザフンと砂から二人を引っ張り上げた。

安全な岩の上で、二人はケホケホと口の中の砂を吐いた。

「あんたまで付き合う事なかったのに…」

「ホントです…。もうコメンです…ケホホ…」

娘は手の中の痛みが付いた。掌にしっかり、緑の珠の付いた櫛を握りしめたままだった。掌を開くと、櫛の歯の跡が白く残った。

長がそれを覗き込んだ。

「翡翠の珠の櫛…」

「ヒスイって言うのか? この石。母者の形見だ」

「…それ、私の父が、浅葱の君にあげた物です」

「え?」

モエギは戸惑ったが、長は慌てて言った。

「ああ…、そんな、特別な意味は無くて…。私の父と浅葱殿の父君は旧知で、子供の頃はしょっちゅう父と西風を訪れていました。その時のお土産の一つですよ」

「ふうん…」

娘は改めて古い櫛を掲げて眺めた。遠い北の草原から来た品物なんだ…。

長は膝を抱えて座り込んで、何処とは無しの遠くを眺めた。

「浅葱殿は、私よりちょっと年上で…、そう、さっきの少年達と貴方…位な感じでした。私が父に叱られて、こんな感じで座り込んでみると、後ろからそっと近付いて…」

「慰めてくれたのか？」

「背中からトカゲを入れました。昔からホント、意地悪なヒトで…」

「……………」

「西風の里の老人達とうちの年寄り達が、しょっちゅう二人をくっ付けようと盛り上がっていましたが…、私達にはいい迷惑でした。そんなじゃないんです。そういう縁は薄いんです。あのヒトとは。いっつも、二人して、苦笑いし合って……」

……………

長らく言葉が途切れて、不思議に思ったモエギが覗き込んで、

めんくらった。

「すみません、ちょっと、泣きます……………」

片手で目を覆って、そのヒトは背を丸めた。

「律儀だな、あんた。泣くのにはいちいち断んなくていいのに…」
群青色の髪を肩から滑らせて、そのヒトは暫く震えていた。

男が泣くなんて、以前は女々しいと思っていたが、今はそうは思わなかった。

「蜜柑の蜂蜜漬け…、食べた事、ありますか？」

そのヒトが目を拭いながら唐突に聞いた。

「え？ あ、ああ、母者がよくくれた。東方の縁者からの土産だと…??…!!」

モエギは目を見開いて、長をマジマジと見た。

「一度も逢いに行かなかった、なんて事はないです。老人達が騒ぎするので、内緒で里の外でちよくちよく逢っていました。決して、貴方のせいで疎遠になったなんて事はないですから」
モエギは真っ赤になっとうつむいた。噂に惑わされて、決めつけて、勝手に拗ねていただけなんだ。

「貴方はホント、浅葱殿にそっくりですね」

長が、ぼつりと言った。



「まさか……」

モエギはうつむいたまま否定した。

「さっきも『おんなじ顔』とか言ったけれど、どこが？ 母者みたいに綺麗でも凛々しくもない。おまけに能力も受け継いでいない。里では鬼子で通ってる」

「そうでしょうかねえ？ 私に言わせれば、瓜二つなんですけど」
長は目の前で指を立てて数え始めた。

「まず、ガサツで口が悪い。そそっかしくて早とちり。ドジ、意地悪、跳ねっ返り……」

「おふ!!」

長はすまして指を折り続ける。

「そして、真っ直ぐで決して折れない。弱い者を護る、慈しみの心で満ちている」

「……私は、違う……」

長は構わず続けた。

「優しさは父君譲りですね。その瞳の色も……」

「父を、知っているのかっ?!!」

モエギは飛び上がった。母すら教えてくれなかった事。

長はケロリと答えた。

「ええ、父君にもよく相談されていましたから。また彼女の機嫌を損ねてしまった、どうしよう? とか」

子供に、西風の里の入り口を吐かせようと捕らえたが、もっと便利な獲物が来た。子供に爪を立てて見せたら、この娘が案内してくれるだろう。

蜥蜴達が羽根を広げて飛び掛かろうとした瞬間…!! 包囲の一面が崩れた。漆黒の騎馬を先頭に、灰色の騎馬の一团が、蜥蜴の中に斬り込んで来た。

「ドジ姫、ホサツとしてんじゃねえ!! 大事なちびっこナイトを護ってやらにゃ!!」

「う、うるさい! お前らの助けなど…!!」

モエギも乗馬して、黒の騎馬と背中合わせに子供達を囲った。

「助けじゃねえ! こいつら、俺等の敵でもあるんだ!!」

「え…?!」

一瞬気が反れたモエギの前の砂地がはじけた。

——ザシュッ!!

ハトゥンが立ち塞がり、剣を一閃する。大蜥蜴が真っ二つになつて宙を飛んで行った。

「?…?!」

「ステルス能力だ。こいつら光の加減で姿を隠せるんだ。交渉の席でいきなり両側に攻撃を仕掛けたのは、こいつらだ!!」

「何だつて?!」

「こいつら、流れモンだ。有力な部族同士を闘わせて、漁夫の利を得ようとしやがったんだ!!」

「……!!」

「あのヒトが教えてくれた」

ハトゥンは上空の緑の馬を視線で指した。

「ちょっと冷静に調べれば、すぐ分かる事なのに…って言われた。俺等も頭に血が昇つてた…ごめん」

「ああ…、私こそ、…すまない」

二人は背中を合わせて剣を構えた。何だかどんな敵が来て大丈夫な気がした。

モエギとハトゥン、そして灰色の砂の民の騎馬の働きで、大蜥蜴達は蹴散らされた。しかし逃げた何匹かが上空で集まった。しくじった…、体勢を建て直そう。なに、両方の部族の同盟

は流れている。西風の部族は年寄り子供ばかりだ。あの希少な

水源地はいただける!

•••?!

上空の目の前に、長い髪をオーラに逆立てた騎馬が浮かんでいた。

「運が悪いですね、アナタ達。・・私は、今、モノすんごい、

機嫌がワルいんです!!」

長い夜が明け、東の地平に赤みが差して来た。

「蒼の長様…、意外と薄情なんですね」

小さいナイトの一人が言う。

「あのヒトに掛かったら、こんな蜥蜴ども一撃で終了だ。でもそれで済ませていいのか？　って話だ。解るか？」

ハトウンは幼い顔の少年に噛んで含めるように言った。モエギもハトウンの横顔を見て、素直に頷く。

「やれやれ…」

蒼の長は遠くからその様子を眺めて剣を収め、西風の里へ馬を向けた。あのヒトの葬儀に立ち会わねばならない…。

「まったくとく…、どうして、こう、いつもいつも……」

明るい茶色の瞳のその少女は、子供だった彼を通り越して、いつも後ろのヒトを見ていた。そのヒトに貰ったオモチャみたいな櫛を、後生大事に身に付けていた。

彼女が、砂の民の余命幾ばくもない青年と真剣な恋をした時も、彼はただ相談に乗り続けていた。彼女が愛するヒトの分身を身体に宿してそのヒトを見送った時も、彼はただただ傍らに居るだけだった。

そして、彼女はそれ以上寄り掛かってはくれなかった。

そういう間柄なんだ。そういう縁えにし薄い間柄でいたからこそ、気安く長らく、隣に居られたんだ……。

蒼の里の弟子達も、妹も、自分がえらく淡泊で、恋愛なんてモノに昇せないタイプだと思っている。

違う……。

それなりに、恋心は抱くんだけれど、いつもいつも、相手には既に想いを寄せる別のヒトがいて、始まる前に終わってしまう。いつもいつも、人知れず密かに、フラれ続けているだけなんです……。今回だって……

「あのヒトが生き返って来たのかと、心臓が口から飛び出る位、心踊ったのに」

オレンジ色の瞳の娘は、黒騎馬の青年しか見ていない。多分これからまた、部族違いの恋の相談に乗る羽目になるんだろう。そういうのが自分の役回りなんだ。

でも、そんな自分を、そう嫌いでもない。

ヒトを好きでい続けるのは自由だ。そのヒトの事を想い、そのヒトの幸せを手助けする事で完結してしまっても、それを恋の成就と言っていないんじゃないか？

輿に乗せられた棺が池の対岸へ渡る。そこで彼女はゆっく大地に還る。

上空に綺麗な風が吹いている。風はそのヒトを送るため、空一面に鈴蘭の原のような美しい千切れ雲を作っていた。

〜おまけ〜

「おい、おっさん！」

蒼の長は一瞬止まって、キョロキョロ辺りを見回した。

「あんただよ。いつまでも『あんた』じゃ、悪いから、呼び方を変える事にした！」

オレンジの瞳の娘は、屈託なく言い切った。

「それで『おっさん』…ですか？ もうちよっと…その…」

「おっさんだからおっさんだろ。それとも『おじ様』とでも呼んで欲しいのか、この私に？ 気持ち悪いだろう？」

「……保留にしておいて下さい……」

西風の里の長が亡くなって幾ばくか経ったが、里の再生の道は簡単ではない。若者の殆どが戦で命を落としてしまったし、子供達を教育する者もいない。長の血筋はこのモエギだけなのだが、長の能力を継承しているかは怪しい。

蒼の長は西風の里に留まり、様々な世話を焼いていた。何と

いってもこのヒトが居るだけで、他の乱暴な部族からの侵略の抑止になった。

そのヒトをおっさん呼ばわりもないもんだが、モエギなら何だか苦笑いして許せた。

「また、年寄り達に『チャチャ』言われたのか？」

モエギは放牧地の柵に腰掛けて、干し肉を半分に裂いて長に寄越した。

「はあ、貴方の縁談について…」

長は干し肉を受け取って、端っこを噛んだ。

「ほんっと好きだなあ、年寄りはそういうの」

「取り敢えず私はお断りました。あんな跳ねっ返りはごめんですって」

「あはは、まあそうだろうな。んで？」

「そしたら、蒼の里に誰か手頃な男性はいないか？ って」

「諦めが悪いね」

「三人の有能な長がいるけれど、二人は妻帯者です。残る一人は…」

長は、モエギと残る一人が対面した図を想像した。

「……絶対…無理……」

低い声で言った。

「へえ、そいつと会ってみたいもんだ」

「そしたらね、妻帯者でも、第二夫人でどうかって」

モエギは干し肉を噛み千切った。

「バカにしやがって！」

「まあ、一人は妻一筋だし、もう一人はそんな事やらかしたら細君に半殺しにされます」

「へえ、…なんか、そいつらにも会ってみたいいな！」

モエギは面白そうに柵の上で足をパタパタさせた。

「その内、誰か一人来ますよ。私と交代で」

モエギはパタパタを止めた。

「…交代？ おっさん、帰っちゃうのか？」

「おっさんはこれでも忙しいんです。里に教育中の弟子もいるし、なんやかやと用事もあるんです」

「…そうか…」

モエギはちょっと寂しげにぼつんと言った。

放牧地の奥から、一頭の騎馬が駆けて来た。ちびっこナイトの一人だ。長を見て一瞬躊躇したが、モエギに一枚の手紙を差し出した。手紙を受け取りながら、娘の頬が紅潮するのが分かった。

長は柵から反動を付けて離れた。

「蒼の一族はね、風と大地を司つかさどるんです」

「……？」

モエギと少年はキョトンとした。

「大昔、風の力しかなかった先祖が、地上に降りて、今の里に住んでいた大地の妖精と交わったんです。そして良い所も悪い所も分け合って、蒼の一族になったんですよ」

「……………」

「要するに、血統だ云々言う老人の言葉は、聞き流しても良い事です。交わる事が未来を開く場合もあるんですよ」

そこまで言って長が振り返ると、柵から降りたモエギが目の前に立っていた。

「おっさん…!!」

いきなり首根っこに抱き付かれた。

「ありがと、ありがと!!」

モエギなりに悩みは深かったんだろう…。

砂の民の村は、多少の林野と砂の丘に囲まれた、風の来ない盆地にあった。

「あそこの家だけけど……」

灌木の繁みに隠れて、ハトゥンは、モエギに言われた氏名の家を指差した。

古い石造りの家の前で、疲れた感じの老夫婦が、寄り添うよ

うに、薪を束ねたりの外仕事をしていた。

「大分昔に、一人息子を亡くして、今は二人暮らしらしいよ。」

誰なの？ 仇とか言うなよ」

「うん……」

蒼の長はその名前をモエギに告げて、こう言った。

「母君が貴方の父の名前を明かさなかったのは、その頃の両部族の關係から、彼の家族に負担が及ぶと思ったからです。あと……」

「……」

「貴方を独り占めしたかったのもあるでしょうねえ」

「……母者……」

モエギは灌木の中で立ち上がって、真っ直ぐその老夫婦の所へ歩いて行った。

「お……」

ハトウンが慌てて着いてくる。

「ごんちほ……」

突然現れた見知らぬ娘に、夫妻は目を丸くした。

「それ、重いだろう。私が運んでやるわ」

娘は薪の束を「ヨイ」と担ぐ。

「あ、あの……」

「心配すんな。私は力持ちなんだ」

「はあ……」

茫然と突っ立っているハトウンに、娘は振り向いた。

「ほら、お前も手伝えー！」

「あ、ああ……」

訳も分からず力仕事をさせられる総領息子に、おろおろする老夫婦。かなり乱暴だけれど、この娘なりに、良い形を作ろうとしている。

この盆地に……、古い両方の部族に……、新しい明るい風が吹くのも、もうすぐだろう。

くおしまい

二〇〇九・一一・二十五